

伊東静雄 生誕から就職まで

――編年体的備忘録――

三好達治や谷川俊太郎の詩集をひもとくとき、彼らの生涯に、あるいは生の軌跡に思いをいたすことは、筆者にはない。もちろん彼らには彼らなりの生きて行く上での修羅場があった。しかし、萩原朔太郎、中原中也、伊東静雄のように、詩を書くことでかろうじて生存の危機を回避し、平衡を保ったという、そういった感じが三好や谷川からは伝わってこないのだ。もちろん、それはある詩人の作品との邂逅が筆者自身の肌にあったか、あわなかったかだけの話なのだが。

静雄二十五歳、同人誌『明暗』昭和五年五月号に発表した「空の浴槽」と、その発展形である『コギト』昭和十年八月号「漂泊」(三十歳)を理解するには、彼の生育史や精神史が筆者には必要となる。

大岡昇平はいう、「人を愛しすぎるのは不幸のもとである。「己れの如く隣人を愛せ」という言葉は、逆説を弄すれば、自分以上に隣人を愛してはいけないということ、報いられないなら渴きを残す。愛と渴きの悪い循環は多分一生中原を離れないだろう」(二〇六頁)。昭和二年の「宇宙の機構悉皆了知」の傲慢な詩人が、世の中にどうにもならぬことがあるのを知ったのは女のためで、そこから神の観念が中原に現われると大岡は指摘する。伊東静雄にも《愛と渴きの悪い循環》はあった。詩人の生涯を追うことのできる、中原中也のような立派す

渡 部 満 彦

ざる記念館は不必要だが、詩人の内面史はその生育史と表裏一体とみる見方を伊東静雄の詩篇が筆者に要請する。

伊東静雄の伝記的事実や年譜について考えようとするとき、あるいは彼の詩作品の鑑賞を文章にしようとするとき、いつも軽い逡巡をおぼえる。人文書院の『定本伊東静雄全集』(昭四六)の「後記」で桑原武夫は次のように書いている。

未亡人は、伊東が生前詩集に収録することをひかえた未熟な初期の作品を世間に再発表することは、故人の盛名をきずつけることにならないだろうか、また、日記、書簡などの公表は私生活の暴露であつて、特定の個人に迷惑を及ぼす恐れはないだろうか、という懸念を最初しめされた。遺族としてもつともな配慮であつて、私も中心いささか同感するところがあつたのである。しかし、客観的に考えれば、伊東静雄はすでに歴史の中の人物であつて、もはや遺族や友人のみが私有すべきものではない。そして一般に、業績をあげた優秀な人物というものは、世人の尊敬にたいする代償として、おのれの欲しないところまでも世人に知られてしまわねばならぬ、という運命を避けることができないのである。世界

ないし日本の著名文学者で、例外をなすものはないといつてよい。
(五五一—二頁)

続けて桑原はいう、《彼の初期作品、日記、書簡等は、伊東個人についてのみならず、一般に、詩人はいかにして形成されるか、詩は詩人のうちにいかにして成熟してゆくかについて、さらに昭和初期の敏感な青年はいかに悩みつつ生きたかについて、多くの示唆をあたえる》と(同)。

桑原は《世人の尊敬にたいする代償として、おのれの欲しないところまでも世人に知られてしまわねばならぬ》といっているが、一方がかつて触れたように、杉本秀太郎は《伝記家、書誌家の手によって伊東静雄は撫でまわされて黒光りしているが、彼の詩そのものは白い状態のまま取り残されている》と不快感を示している(『伊東静雄』近代日本詩人選一八、筑摩書房 昭六〇、三頁)。そのためだろう、巻末の年譜は三頁にみたない、「年見出し」を取りのぞけばわずかに十三行の簡潔なものである。

しかし、杉本編集による岩波文庫『伊東静雄詩集』(平一)の年譜はかなり詳細なもので、二段組で十一頁に及ぶ。この年譜は『ユリイカ』昭和四十六年十月号の「詳細伊東静雄年譜」とほぼ重なるが、同文庫の『わがひとに与ふる哀歌』の「解説」で杉本は次のように述べる。《表題を見れば、だれしも、これは恋愛詩集と思うにちがいない。「わがひと」とは、ひとりの熱愛された女性を指している。そう思いこんだ人を責めるいわれはない。それに、詩集を買って読もうというほどに詩の好きな人は、とかく思いこみが強いものである。詩人なら猶更である。(略)。だが、果たして「わがひと」は、ひとりの女性を指していたのだろうか(二四〇—一頁)。これは正しい見解であり、そこで筑摩書房版は素っ気ない年譜で十分と思ったのではないか。

杉本のいう、《伊東静雄のことを考えるところは、私には、彼が書いた詩を彼みずからまとめた詩集のなかで考えるところにひと

しい。当然ではないか》(三頁)という正攻法に誰も異をとねえることはできない。詩集の向こう側の独りの詩人を全人的に理解するためと称して、詩人の墓まで暴くことは本当に正しい方法なのだろうかという逡巡。中原中也の伝記的事実や、大岡昇平の中原中也に関する著作は中也の理解には欠かせないが、しかしそこから零れ落ちたものは、一般読者は世に公刊された中原中也の詩集からしか探しえないし、それが詩集鑑賞の礼節であろう。

これも本誌四十号で触れたが、「秧鶏は飛ばずに全路を歩いて来る」にはチェーホフの書簡が反映していると小高根二郎はいう。チェーホフの戯曲『かもめ』、『伯父ワニーヤ』、『三人姉妹』、『桜の園』には、「医による癒しとは」、「ものを書く、つまり文章で表現するということとは」、「生きていくということは何?が主題として見え隠れする」。この三主題がみごとに投げ込まれているのが『伯父ワニーヤ』であろう。作品からその部分を順に見てみよう、訳は神西清訳『かもめ・ワニーヤ伯父さん』新潮文庫 昭四二による、なお原文は省略する。

アーストロフ まる一日、あくせく働いて、ちよいと一服するまもないし、これぼっちの物を、口へ入れる暇もなかった。やっそこさで、家へ帰ってみると、やっぱり休ましちやもらえない。——鉄道から、線路工夫を一人かつぎこんで来てね、手術をしてやろうと、そいつを台の上へ寝かしたら、やっこさん、クローホルムにかかったなり、ころりと死んじまったじゃないか。ところが、よけいな時に人間らしい感情が、ここんところで(胸をおさえて)目をさましてね、まるでその男を、わざと殺してもしたみたいに、気が咎めるんだ。……そこで私は坐りこんで、こう目をつぶって——こんなことを考えたよ。百年、二百年あとから、この世に生まれてくる人たちは、今こうして、せっせと開拓者の仕事をしているわれわれのことを、ありがたいて思ってくれるだろうか、とね。ねえ、ばあやさん。そんなこと、思っちゃくれまい

ねえ。(マリーナ たとえ人間は忘れても、神さまは覚えていてくださいますよ。)(一〇七頁)

ワーニャ たかが寺男の件^{せがれ}がさ、官費で勉強させてもらって、まんまと博士号だの教授の椅子だのにありついてさ、(略) まる二十五年のあいだ、やれ芸術だの、やれ文学だのと、書いたり説教したりしてきた男が、そのじつ文学も芸術も、からっきしわかっていないという事実だ。やっこさん二十五年のあいだ、やれリアリズムだ、やれナチュラリズムだ、やれくしゃくしゃイズムだと、人様の考えを売って来ただけの話さ。(一一一〜一二頁)

ソーニャ でも、仕方がないわ、生きていかなければ！(間) ね、ワーニャ伯父さん、生きていきましようよ。長い、はてしないその日その日を、いつ明けるかもしれない夜また夜を、じっと生き通していきましようね。運命がわたしたちにくだす試みを、辛抱ぶよく、じっとこらえて行きましようね。今のうちも、やがて年をとってから、片時も休まずに、人のために働きましょうね。そして、やがてその時が来たら、素直に死んで行きましようね。あの世へ行ったら、どんなに私たちが苦しかったか、どんなに涙を流したか、どんなにつらい一生を送って来たか、それを残らず申上げましようね。すると神さまは、まあ気の毒に、と思ったださる。その時こそ伯父さん、ねえ伯父さん、あなたにも私にも、明るい、すばらしい、なんとも言えない生活がひらけて、まあ嬉しい！と、思わず声をあげるのよ。そして現在の不仕合せな暮らしを、なつかしく、ほほえましく振返って、私たち——ほっと息がつけるんだわ。わたし、ほんとうにそう思うの、伯父さん。心底から、燃えるように、焼けつくように、私そう思うの。……(伯父の前に膝をついて頭を相手の両手にあずけながら、精根つきた声で) ほっと息がつけるんだわ！(一九二〜三頁)

これらの台詞が登場人物のものか、チェーホフ自身の見解かは検証する必要があるので、ここはその場ではないし、そもそもなぜ筆者はチェーホフを持ち出したか？結局、筆者自身も《やれ芸術だの、やれ文学だの》、《やれリアリズムだ、やれナチュラリズムだ、やれくしゃくしゃイズムだ》と、人様の考えを売って来ただけの話》とワーニャに揶揄されても抗弁できる用意がないというならしなから来る戸まどいである。本稿は他人の文章を内容の真偽の確認もとらずに引用しているにすぎない。しかしワーニャよ、所詮私たちは *Теловек в дыму* としてしか生きていけないのだよ。

さて本題に入るが、伊東静雄は大塚格宛書簡で孤独と赤貧を吐露しており、湯銭代さえも友人から調達したといったことも書簡に見える。そこでこの編年体的備忘録では判る範囲で該当年の物価を載せた。なお彼が青春期に覗いた内外の図書は本誌四〇号の「伊東静雄 青年期の読書体験」のリストと重複するので割愛した。

明治三十九(一九〇六)年

十二月十日 長崎県北高来郡諫早村二〇八番戸にて、伊東惣吉(明治元年五月二十五日生)、ハツ(明治九年七月十五日生)の四男として誕生。

惣吉は酒はあるていどたしなんだが、穏和で実直な好人物(小高根)。

(明治二年諫早、佐賀県に、同四年長崎県に編入、明治十一年郡制施行により北高来郡となる)。

《生家は諫早の町から雲仙岳の方へ続く道が町を出はずれるあたり、^{ひやまつた}松下とよばれるところにあった》、《町の南東のはずれ》(川副国基)。
《市街地外れの付近を這松下といひ遊樂街で、昭和15年諫早市成立時から厚生町と通称されたが、第2次世界大戦後一変した》(角川日

本地名大辞典)。

《伊東静雄の生家は丘の裾にある。船越というその地名は、船を担いで越えられるほどの高みすぎなかったがゆえに生じた。土地でもっとも古い史蹟も、この一画にのこっている。丘には日が射し、影が宿る》(野呂邦暢)。

一月三十日午後四時 三男岩蔵死去(明治三十八年二月十四日生)、善生露現孩子。

《すぐ上の三男の岩蔵は静雄の生まれる十一ヶ月前に、満一歳になる寸前に死亡している》(福地邦樹)。

一月十六日 同志社会堂に電灯が点灯。

明治四十年六月一日 第六高等学校寮舎に電灯設備。

米 十キロ一円五十六銭

明治四十二(一九〇九)年

十月三日 二女リツ出生。

《三歳下の妹リツは、頭はよかったが変り者で、静雄の結婚後は母と共に大阪に来て共に暮らし、結婚することがなかった》(福地邦樹)。

*伊東静雄の結婚は昭和七年四月三日(山本皓造、六九頁)とされているが、婚姻届出は同年九月十三日となっている。その前にリツは大阪に来ている。

《かういふ風の家には、かりて住むことになりました。妹は明日の夜来るさうです。然し私は思ひます。この新しい生活は、私にも妹にも、きつとそんなに愉快なものではないだらうと》(昭和四年十月十一日付酒井百合子宛封書)。

牛肉百グラム十銭。

明治四十四年六月二十日 島原鉄道本諫早、愛野間開通。

明治四十五(一九一三)年

四月九日 五男寿恵男出生。

《末弟の寿恵男は静雄と同じく京都大学を卒業し、長崎県の教育長にまでなった》(福地邦樹)。

《静雄》六つの時、明治天皇の御大葬があり、大正天皇の御大典がございました。その活動写真を見に行つて、(静雄は)これは天皇陛下の御大葬の楽隊よと、いともおそかに又悲しく、かなで、これは御大典の楽隊よと、又違ったところのあつたものでございました》(江川ミキ)。

《明治四十五年の夏のことである。本郷菊坂の通りは日暮れになれば立木のかげに飛び交うこうもりに、子どもたちが道に落ちていられるわらじを投げつけて遊んでいた》(近藤富枝)。

大正二(一九一三)年

四月 諫早町尋常小学校入学

ぼくのうた(部分)

わたしは 小がつかうのじぶんから
さくぶんが むやみに へたでしてね

じゆうだいがでると きまつて
さくぶんはほんとにむづかしい と

いふことだけ かいたもんです

《父は裏町にあった小学校で伊東静雄より一級上であった。裏町という町名はついでにいえば現存しない。いまは八坂町とよばれる一郭である。裏町と同じく上門口、^{かんもんぐち}大手口、魚ん棚、田町、五反屋敷、などの地名も、明治うまれるの諫早人でなければたちどころに「そこは…」と答えられないようになった》(野呂邦暢)。

○小学校時代

《故郷では、私たちは十四、五の両日は、夕方から、家一等の晴着を着、又子供の私たちは白麻の五紋付をつけて、墓地の前に集り、明々と数十の灯籠をその前に吊り、虫の声をきいたり、又遠くの丘墓地の電飾にま違ふやうな美しい灯籠の灯をながめながら、夜をすごした。母は家に残り、ありつたけを座敷の中おうにともした灯籠の火照りの中で、客に焼酎や菓物を振舞った》（『今年の夏のこと』）。

《かせやさん》というのが綿糸商に変わった伊東家の呼び名であった。

紡いだ糸をかけて巻きとる道具が棧である。棧屋伊東家の店頭情景を吉田順子は覚えている。その頃、伊東家は新しく建物を造作して家畜の仲買をしていた当時の面影はなかった。道路に面してあけはなされた店舗のなかには棚が何段も並び、その上に赤、白、黄、青に染められた綿糸が棧に巻かれて積まれてあった。店に坐っていたのはいつも伊東静雄の母ハツであった。父惣吉の姿を見かけたことはあまりなかったという》（野呂邦暢）。

大正三（一九一四）年

八月十六日 戒名塔、玉泉孩子、零歳。（玉泉孩子の性別は不明、諫早広福寺に埋葬）。

《私の故郷の家では、新佛の家では、二間もの長さの藁や、板の舟に、家々の紋章のは入った三十も四十もの灯籠を吊し、ご馳走を満載して、賑やかな町の大通りを、歓声をあげて通りぬけ、町の中央の大川に、有明海の満潮で上つて来た海水が、ひいて行く夜の十時頃を見はからひ、その人数があやしまれる町中が両岸にぎつしり集つて見物し、品評してゐる中に、火花をうち上げ、煙硝を鳴らして下流の有明海の入口まで、人々が泳ぎ添ひながら、それらの舟を送つて行き、そこで火をかけるのであつた。華やかな思ひ上つた歓声の中に、満月に

遍照された光景は、南の地方の真昼間のひかりかがやく寂寥を、生れながらに知つてゐる人間には、胸をしめつけられるやうな追憶である》（『今年の夏のこと』）。

卷タバコ 朝日 十銭

大正五（一九一六）年

諫早電灯株式会社設立。

大正六（一九一七）年

七月十五日 ミキ、潤三チブス発病。

十八日 リツ、チブス発病。

八月十五日 二男潤三、腹膜炎併発、午前零時三十分死去、十五歳（明治三十五年四月八日生）。受学鼻順善士。

十月中旬 静雄発病、四ヶ月病臥。

《わたしは小学校の頃ひどい病気で、半年も床に就いてゐたために、その辺の地理の授業をうけなかつた》（『白河』）。

《あの人が五年生の時のことでございます。忘れもいたしません、七月十五日に私のすぐ弟で、伊東静雄の次兄で大村中学校の二年である伊東潤三と、そして私が同日に、三日後に又妹が、三人でチブスを発病いたしました》（江川ミキ）。

《次男の潤三は工業学校の三年生の夏に亡くなった。この時（大正六年八月）兄弟はみな腸チフスに罹り、小学五年の静雄も死にかけたという。この四歳上の潤三が実に優しい兄さんで、彼の死は静雄には特にこたえているように思われる》（福地邦樹）。

*潤三の学歴については確証がとれていない。

二月 萩原朔太郎『月に吠える』感情詩社・白日报社刊行。

十一月 詩話会結成 機関紙『日本詩人』刊行。

大工手間賃一円五十銭

大正八（一九一九）年

三月 諫早尋常小学校卒業

《父は這松下の伊東という生徒をかすかに記憶している。しかしそれも「まじめな秀才が一級下にいた」という程度で、格別に印象の鮮かな生徒ではなかったようである》（野呂邦暢）。

四月 長崎県立大村中学校入学 入学生八十二名、

《入学願書を提出したのは県立中学玖島学館であり、入学許可を受けたのも玖島学館からであった。四月六日の入学式に当り、洪江館長先生から四月より校名が変更されて、長崎県立大村中学校と改名されることになったと聞かされ、子供心にもいささかびっくりしたことを覚えていた》、《彼は中学の頃は黙々と勉強し、あまり目立たない存在であった》、《ところが彼は中学四年から旧制佐賀高等学校に入学し俄然注目を惹いた》（大我勝躬）。

《汽車のなかでも他人に話しかけもしないでひとり英語の単語を覚えているような中学生》（川副国基）。

無口で心は強い真面目一方の勉強家（蒲池）。

《中学に通う間、朝六時半に家を出て、走るようにして諫早駅に着き、六時五十五分の汽車で大村中学校に四年通いました》（江川ミキ）。

薪の明り 散文詩

冬になるとよく思い出す詩がある。

誰の作か忘れたが、「捨てられた下女」と題するドイツの詩である。

寒い冬の朝、人も家畜もまだぐっすり睡っているまっ暗な時刻に、はやひとり起出で、かまどの前にうづくまつて、その顔を薪の火に照らされながら、かすかにひとり言をいゝ、涙を流す、それは男に捨てられた下女の悲しみをあわれんだ詩である。

子供の時三里はなれた町の中学校に通学していた私もそういう時刻にふと目ざめて、御飯をたいている母や姉の姿を、かまどの明りの中に度々見た。

そんな時、「もうしばらく寝ていなさい。」と彼らは言ってくれた。

今私は、田舎に罹災疎開したまゝ、まだ都会に帰れずにいるが、曾ての母や姉の代りをしてくれるのは、妻だ。

暗い冬の朝、かまどの前、まきの火の明りの中にうづくまる女の姿ほど、あわれなものはない。

米十キロ三円四銭

大正九（一九二〇）年

大宰府観世音寺等に修学旅行。

《私が国宝の仏像といふものを初めて拝し、それが国宝といふことのためだけに言い難い歴史的感慨を覚えたのは、物寂びたその寺で、中学二年の修学旅行の時であった》（「沙弥満誓の歌」）。

大工手間賃二円九十二銭 理髪三十銭

大正十（一九二一）年

おしる粉十二銭

大正十一（一九二二）年

第一高等学校授業料五十円

大正十二（一九二三）年

四月一日 諫早町、諫早村、北諫早村の三町村合併諫早町となる。これにともない静雄の本籍地は長崎県北高来郡諫早町船越名四二七番地となる。

明治三十八年諫早小学校は諫早町尋常小学校、諫早村尋常小学校、北諫早尋常小学校に分離、小学校は通称、町学校、村学校、北学校と呼ばれていた。酒井百合子は北諫早尋常小学校に通学。

四月十六日 佐賀高等学校文科乙類入学、入学式挙行。

佐賀高等学校は大正九年四月十七日勅命第百十号により文部大臣直轄諸学校官制を改正して設置された。一二〇六名の受験生のうち、一八八名が入学を許可された。教員三十四名、生徒五四九名。

七月 一週間倫理担当の調円理先生の同朋結集なる坐禅会に参加。

《十四年前佐賀の高等学校の寄宿舎で、いゝ加減な本で初めて万葉集など読み出した》（沙弥満誓の歌）。

一月 『文芸春秋』創刊 二十八頁、十銭

アンパン二銭五厘 ジャムパン五銭 うどん・そば八銭

大正十三（一九二四）年

三月四日 学年末試験。

諫早出身酒井小太郎が英語担当講師として赴任、居宅を訪問し、安代、百合子姉妹とも交誼をむすぶ。

《高等学校が》休みなると、よく三人（静雄、大塚、大我―註）が集まって公園を歩いたり、腰をおろして喋ったり愉快に休みを楽しんだ。時には夫々の自宅を訪ね、泊り込んで夜を徹して語り、歌い飲を尽したこともあった。伊東君の家は這松ひやまつの下（現在厚生町）であり、大塚君の家は長田の小豆崎、私の家は久山であって可成り遠かったが、下駄履きでぶらぶら歩いて訪ね廻ったものである。このような時よく歌った彼は、酔うほどに下向き加減に、低い声だけれどもまこと情感に溢れた歌い方をしていた》（大我勝躬）。

七月十一日 午後の汽車で諫早帰省（大塚）。

九月 三越、松坂屋、白木屋、松屋、高島屋の五大呉服店で組織していた五服会が日本百貨店協会に発展し、大阪、京都、名古屋、横浜の百貨店がこれに参加した（昭和大阪市史）。

十月 百合子、諫早から小太郎の任地佐賀に母婦美、姉安代に先立って行き、小太郎を訪れる静雄に会う。静雄は酒井家をおとずれたくても気がひけて門前をむなしく徘徊していたという（川副）。

大正十三年の佐賀高等学校の授業料年五十円、毎月寄宿料二円、食費十五円、その他の諸費一円五十銭、計十八円五十銭が入用。また入学初年度には制服、白線三条制帽、外套、巻脚絆、教科書、行軍費等

で百五十五円近い出費であった。

大正十四(一九二五)年

三月 酒井小太郎 姫路高等学校に赴任(昭和十四年十二月まで在職)。

四月 大塚格 山口高等学校入学。

四月十八日 新入生歓迎会ならびに歓迎ストーム(大塚)。

《一九二二年(大正十一年)から一九二五年(大正十四年)にかけて松本高等学校の学生であったころのことを思い出してみると、東京と地方との間にあったある食い違いに気づくのである》(中島健蔵)。

五月九日 佐賀は楠の青みで光つてゐる。雨の日は殊に綺麗だ(大塚)。

五月二十一日 葉書封入は一寸恐れ入った、水くさの限りだね、佐高一の貧乏人でも三銭やそこらはある、山口にも行きたい、今度の日曜は吉井浜に行きたい、金で苦労するのはお互いでね(大塚)。

六月二日 佐賀は濃い霧の夜だ。何となく淋しい宵だ。近頃は短歌や俳句やらを読んでゐる。一茶の性格や生涯や、その芸術には強く打たれた(大塚)。

七月十七日 佐賀郡本庄村福林寺滞在。

九月二十二日 トルストイ『我が宗教』を日に二頁、二頁と少しづつ読んでゐる(大塚)。

十月五日 筑紫野も全く秋になつてしまつた。稲が心よく首をたれてゐる(大塚)。

十月七日 はじめの筑紫野をとほり、水漫々の筑こ川をこへて、久留米に参るために若津と云ふ小さな町に来て、あなたに便りしてゐます(大塚)。

十月中旬 大塚格、佐賀に来訪。二人で鹿家、唐津へ足をのばす。十月二十二日 自然のふところで黙思と読書と詩作に耽つてゐる(大塚)。

十一月八日 国木田独歩、北村透谷 かゝる人々の青年時代の苦悩を思ひては涕涙禁ずる能はざりし(大塚)。

十二月十六日 (大塚の封書に)。
我が恋は日に日に清くなりゆくよ狭霧の中に聖像をみつむ

掘れ掘れ勇者生の豎杭
見よやつるばしその先端の
正しき分かちの白光を

○若者らしい苦悩にとらわれ、不知火寮で島木赤彦『馬鈴薯の花』を愛読し、その影響から短歌を作り、校友会誌に発表。

○諫早に帰省すると毎日御館山に登る。

駅弁二十銭 うな重五十銭 ゴールデンバット七銭

大正十五(一九二六)年

一月十七日

《昨夜は何もやめて眠りたいと思つたので。丁度死の心用意でもする様な心持から机に黒いマントをかぶせ、カーテンを閉じて、五時半から、今朝の八時までぐつすりねた。時々夜半などに夢ともつかず現ともつかずに昔のことを思ひ出した。今は死んでゐる兄と二人で三貫

目とか五貫目とか云ふ木炭をおとくい先に運んで行つた頃のことを夢みてゐた。また、向ひの酒屋の小僧のことも思ひ出した。あの小僧はよく自分達に木で武者人形を作つて呉れた》(大塚)。

○殺風景なミゼラブルな学生生活。

二月十日 シヨウペンハウエルの『宇宙と人生』を読んでゐる(大塚)。

二月十一日 紀元節式典で大きな声で笑い、体操の先生に叱られる。

二月十五日 小雨の降る中を五時頃あすきな大きな石垣の上に、白亜のやぐらのある栄城門まで散歩してきた。濠の表面の水草が五、六色に分かれて見えて、発狂しそうな頭を刺激する(大塚)。

二月二十一日 (大塚の封書に)。

歌を捨て

歌に捨てられ

二月のこの試をばいかにすごせし。

悪夢のここの二月のあらし行き

今朝かの空に

煙うごかず

二月二十五日から試験。

三月二日 卒業試験放擲、神経の尖り方がひどい、眼底がずくずくうごく、何もかにも興味がとんと起らない(大塚)。

三月四日 卒業式、卒業祝賀会を欠席。

四月 京都帝国大学文学部国文科入学。

佐賀高等学校から京都帝国大学への進学者は六十名で文学科を志望したのは静雄ただ一人であった。

同期生一〇七名には、生島遼一、藤木俊一、佐伯梅友、朝永振一郎、

小川(湯川) 秀樹らがいた。

『佐賀高等学校一覽 昭和五年』によると大正十五年文乙の卒業生は三十五人、二十一名が京都帝国大学、東京帝国大学十名、九州帝国大学二名、進路不明一名、死亡一名、静雄の進学先は京哲となつてゐる。

《服装の汚らしい点では似ていた。伊東は木綿のかすり、よれよれの袴、羽織にむな紐があつたのかなかつたのか……。それでも角帽はかぶっていた》、《はにかみやで、しかも不遜であるところも似ていた。それだから世間と交らない》、《伊東は、穴から目だけだして外をうかがう鼠のようであつた》、《有能の士は先生を中心とした研究会に出席していたようであるが、一人ともそんなものには近よらなかつた》(堀内薫)。

《私が京都で大学生生活をしてゐたのは、大正の終りから昭和の初めにかけてである。九州の田舎から出た性急な私は、京都の温雅清寧の風景に先づ閉口してしまつた。何処へ行つても融和しがたい、憤懣に似た感情を味つた。私の当時の情感は、京都の風景を拒絶したが、悪いことに、私の本質はその美しさを理解してゐたのである。そのため二重にいらいらとし、自分がのけ者になつてゐるのを覚えた。私はこの温雅な風景に向つて、大声に罵倒してやりたい衝動をいつも覚え、おちついたその鑑賞者までが癩にさわつた。自分が大学で専攻した國文学に就いても、又その教室の雰囲気についても、略々同様であつた。／私は仕方なく、下宿にばかりこもつて、出歩くのをやめ、友人とも交際しなかつた。しかも私はかくれて、千年伝統の和歌をせつせと作つたのである。そして和漢朗詠集と新古今集を愛読してゐたのだ!》(京都)。

四月十三日 上京区田中門前町二十五番地 西川鉦作方。《大学は明日より始業の由にて授業時間、教科書等の掲示これあり》(大塚)。

四月十六日 《学校は大したことはない、一週十六時間出席すれば

いゝ、(略) 大変ひまだ、クローバの生えた工学部の草原にねて、例の『美しき思』にふける、吉田山もいい、三年間のいい散歩地、《流石に夜は淋しい、知らない街の辻々を地図をたよりに歩く》(大塚)。

五月四日 上京区寺町今出川上ル四丁目 青木敬磨方。《筆も心も疲れ果てた。(略) 下宿移った》(大塚)。

五月七日 赤貧今や我を圧倒せんとす。アンナカレニナを読み終わる(大塚)。

五月推定(大塚に)。

《夕影のせまつて来る研究室で部あつな古い人の詩集などを読んでゐる近頃》。

あゝ我は詩人

永久の詩人

我が使命は明なり

我に父あり天

我に母あり地

愁々永久に生きん、我は詩人

詩作が近頃の生活、嵐山、御室、知恩院、金閣寺もいとところだが、夜、茫然として三条あたりの大橋の欄干にもたれて人々の雑踏をみるのが嬉しい。夜床に入つてから、二頁三頁と、漱石の文学論やアララギを読む。

勅使は今王橋をわたります。しよの音やめるしじまの中を。

サラサラと若葉に雨のそゞぐ昼 大悲の闇に人は来たらず。

わが性の弱きを人にのじられし夜 我が小房のバラは枯れおり。

「我が使命は詩人」なりと 大声にさげびてみたりのゝじられし

夜

「詩人」の文字を無数に書いて見し、我が性弱きをのじられし夜

お針子の来たらなぬ一日は淋しかり春の日くれて歌をうたへり。やうやくに物思ふ心かへり来ぬ 京に参りて一と月を経ぬ

あゝ我は詩人

永久の詩人

世破らば破れ

人そしらばそしれ

あゝ我は詩人

永久の詩人

我は天地の真子

血統正しき天地の真子、

我が目つねに神を見

我が耳つねに自然の声をきく

我天地の真子

血統正しき天地の真子、

我森より生れし素朴の子

我が求むるは真理の泉

(あゝされど今我真理てふ言葉に
さへ大きな疑を持つに至れり)

常識の木の実は我を毒し

伝統の古木は我を圧せん

今人々は汝を嗤ふ

されどしばらく笑声に耳をふさげよ

常識の木の実は前に盛られ

破滅の刃は背後に光る、

前の美味をえらぶか
後の刃を首にうけんか

あゝ我は詩人
我がとらん所も亦明なり。

*大塚書簡のタイトルを持たないこの二つの詩は、昭和六年十一月十六日付酒井ゆりこ宛書簡に書かれた次の詩により洗練されてつながる。確井雄一は、「空の浴槽」、「庭をみると」、「ののほな」を経て、この詩によって「詩人」主体の自覚が確立した述べる。

私が泉のそばに坐つた時

噴水は白薔薇の花の影を写した

私はこの自然の反省を愛した

私が青空に身を委ねた時

縫ひつけられた幾条もの銀糸が光つた

私は又この自然の表現を愛した

さうして 私の詩が出来た

五月二十五日 近頃は子規を読んでゐる。ストリンドヘルヒの最終の恋を読み耽つてゐる。○近頃旅したき所／信濃路、木曾街道、大阪府下茨木町一七二二、／姫路の町、長州山口町、初夏の筑紫野
百合子さんから手紙が来て呉れたし（大塚）。

六月四日 二日金曜日一人で憧れの奈良に来た（大塚）。

六月十七日 大学の若い人達が獄に投ぜらる（大塚）。

七月 帰省途中姫路の酒井小太郎宅に二日逗留。

翌朝八時山口高等学校の控所に大塚格を訪問、大塚授業をサボり公園を散歩、小さい店でうどんを食し、駅に直行、十二時まで話し、正午頃の汽車で小郡に引き返す。

その晚十時、佐賀高等学校不知火寮に行く。雨、県庁前まで馬鉄に乗る、八錢。二晩伊藤正雄の部屋に宿泊。

サンチマンタルな若いお嫁がいる田舎による。

七月十一日夕方六時 茫然として帰家。

*安代、百合子宛の封書に報知された、これらのことは大塚格宛書簡に見出せない。

*馬鉄——明治三十七年佐賀駅から唐人町、県庁前、片田江を通り、諸富までの佐賀馬車鉄道が設立され社長には百六銀行取締役の福田慶四郎が就任。

公園に橋ができたり、本諫早のあたりに又一つ新しい路が出来る。

八月 諫早で大塚格と一茶などについて語る。風呂の水を近所の井戸に汲みに行く。

八月三十一日 橋の開通式での芸者の踊りなどを妹リツと見物。

九月 上京途次、姫路に下車。夜九時の汽車で十二時すぎに京都帰着。

九月七日（大塚のはがきに）。

まさなる夜の駅頭のプラターヌスよ

我また受難に京にかへりし

我が心酒を求めて毎夜毎夜

かの青楼の灯に行く。

九月十九日 《大塚兄。／今日秋のうるはしさに杖をこゝ、琵琶湖のほとりにいき、異常の感傷とロマンツイクを感じ申し候》。

りないとおもう。

黒谷瑞泉院のアララギの歌会に出で、出席者の頭の悪さに一驚。

十月十八日 正岡子規の全集を読む（大塚）。

十月十九日 清滝川の山深い溪流を散策。

十月二十一日 大学、授業開始。

十月三十日（大塚のはがきに）。

よるばいひつ、この秋風に飛ぼんとす

羽弱の蝶は 紙くずのごと、

はねやぶり とぼんとすれど はかなしや

羽根弱蝶は風に追はれて。

羽弱蝶 お寺の塀にかゞめかし

つれなき風をしまらくよけて。

十月（安代に）

物に寄り泣きたき心わびしくも

我がうたたねは夜ふけにさめて、

サヤサヤに棕櫚の細葉の震ひをり、

そが我が祖父の手にてあはれ。

頬にあて、そのつめたさに驚けり、

かくも冷えしか、いとほし我が手。

○清爽な秋晴れの日、姫路酒井家訪問。

詩に没頭。

『父と子』に感激するが、主人公のニヒリズムにいま一つ徹底が足

十一月二日 《今日、風の中を、三十八度に近い熱をおして、遠足に行つた。保津川を三里のほれば人跡たへてなく、うすぐらい森と、はるかに下方に保津川とをみて、ほんやりあるいて行く僕を想像してくれ給へ（大塚）。

十一月六日 《大塚兄／心があまりに乱れるものだから、今日は、松の青と紅葉の丹と、秋霧のかそかなる間をとほつて、八瀬、大原を二里。こゝ木の葉しぐれのしきりなる寂光院にやつて来た。自然の美と人の和心とは自分の悩心をもしばししずめる様にもへる》（大塚絵葉書）。

*この前後大塚宛書簡に二、三日病臥していることが通知されている。

十一月二十三日 ルソーの懺悔録を金にかへて、博物館に信実の三十六歌仙を見に行く。出家のような気持ちになって万葉集を筆写している。女子専門学校あたりから阿弥陀峰の秀吉の墓へ。

十一月二十八日 吉田山の裏側にあるなつかしい山中の霊場、黒谷に行く。敦盛、直実の墓。夕まけて、誰もおとづれない御堂の中に端坐瞑目。

十一月（安代に）。

黒谷の山門の蔭の石段で子供が二人おはじきをしてゐる
僧ありて今ぞ御帳をとぎすらし夕去りぬればさびし黒谷

十一月（安代に）。

宵を浅み建礼門の上に出し、明星いまだ光放たず

雨やむと滴もやがてけどうなり　そをかぞへつつせんすべもなし
サウサウと木の葉しづくの音みだし　門の老木に風すぐるらし

この家の主となりて二日目の　夜は雨なりき人恋ひてをり
近頃の淋しき人は皆来れ　一つ火かこみて語りあかさ

日に一度御館の山に祈るこそ　二十の我の日課にてありき

*一、二の論文準備のためと、旅費不足のため帰郷せず。下宿に暖房がなく手が凍えるためスチームのある大学図書館で勉強。

十二月二十五日　午前一時二十五分肺炎で臥せっていた大正天皇は
葉山御用邸付属邸で「心臓麻痺により薨去、摂政裕仁踐祚」、昭和と
改元。

米十キロ三円二十銭　牛乳八銭　銭湯五銭　石鹸十五銭　市電六銭

昭和二（一九二七）年

一月　姫路の酒井小太郎家を訪問。

一月二十日　人間は人生の退くつを撃退するために、いろんなことを初めた。宗教も芸術も、学問もそのためらしい（大塚）。

一月（安代に）。

障子を

あくれば

枇杷の木

障子を

させば

枇杷の影

大きな炭引き牛よ白々と山の雪をばいただいて来る。

二月四日（安代に）。

火を吹けばたのしかりけり弧居ひとりゑのさびしさもしばし忘れ居しかな
もちも焼かむコーヒーも立てむと小さなくはだてをもつ我とな
りにし
火桶得て近頃我はなまけをり膝にかこめばうれしきかもよ。

二月十八日から期末試験、欠席多し。

四月　酒井百合子同志社女子専門学校英文科入学

《私は縁があつて帰白院というお寺に御世話になった。そのお寺の奥さんが諫早の出身であったので伊東君は気安く訪ねてくれて互に旧交を温めることができた》（大我勝躬）。

*荷物は帰白院に預けて、春休みは帰郷したらしく、上京のさい小郡駅で大塚にあえず、姫路で下車したらしい（四月十二日付の大塚宛はがき）。

四月十三日？　上京区吉田上大路　長田喜蔵（三）方、下宿代五円。

五月（安代に）。

君が汲みしお茶をしばらく前に置き　ほほづきに似し月の出を見る
何処より集る児等ならむ夕影の　こゝの小路に声あげ騒ぐ

五月十五日　金融恐慌の始り

五月二十六日（大塚はがき）

連兵場を吹きすぎる風あり
しらしらとぼぶらあの小葉は
ゆれてとまらず。

深草連兵場にて

しんしんと孟宗立てる藪深く
ひそかに咲けり黄色露花

五月二十六日 三条の停留所で百合子にであう（大塚）。

○午前中、雨のなかを下宿を探して吉田中を歩く。

土曜（二十一日？）午後、室にるのが嫌になり、三条へ行こうと
河原町丸太町で出町方向から来た百合子に邂逅。

晩に淋しかったので大学図書館に行く、土曜日なので、いつものよ
うにたった一人で、青い据えランプを前にしていろいろなことを考え
る。

雨が降る中、仁和寺から嵯峨野を通って嵐山に行く。広沢の池の岸
の児神社の祠の樟の木の下にかがみながら晩春の雨雲が雨を降らしな
がら、その沼を通りすぎるのを見入る。

翌日夕方、吉田山をこえて四、五丁の神楽岡まで風呂に行く。室に
は文学部の裏の薔薇をインキ壺に活ける。

原稿用紙を買ってきて、歌を書いたり、一寸した文章を書いてみた
りしている。

毎朝、人の起きないうちに、上大路の屋敷町をぬけ、椎の木の暗い
吉田山を越えて、真如堂や黒谷の静かな寺まで散歩する。

《初夏の日八瀬の滝のよこに坐つて佐賀の校歌を唄うてくれた》（青
木）。

五月二十八日 関東軍中国山東省に第一次出兵。

六月二日 徴兵検査の旅費が下り次第、山口に行こう（大塚）。
六月三日（安代に）。

妖のごと遠天はるかに湧く雲に
駆け入る鳥は何の鳥ぞも
病熱ゆるにうつそみに湧くほとこの汗を
ぬぐひて我は淋しかりけり

六月四日 夕方、諫早帰郷。リツの土産に大丸で浴衣購入。途次、
山口下車。大塚格の下宿（糸米謙常方）、森の中の旧家の沼に沿う離
れで万葉集の筆写。湯田を訪問。

六月十二日 山口出立。
六月十五日 諫早で徴兵検査

七月二十四日未明 芥川龍之介自殺。

八月二十六日 左京区聖護院西町一 元岡方から大塚格へ、《転寓
した。三畳の茶室作りの離れで、ことごとく余の気に入った》。

《伊東君は聖護院に下宿し、私は寺町に下宿した。彼の下宿は茶室
風の部屋で大袈裟に言えば本に埋れたような生活をしていた》（大我
勝躬）。

《学校だけの交りであったが一度だけその下宿へ行ったことがある。
なんでも聖護院の近くであった。伊東の短身を入れるのにふさわしい
三畳の間で、これはまあまあと驚くような所であった。それでも壁に
は、（略）千家元暦の色紙がかざってあった》（堀内薫）。

同志社専門学校高等商業部 宮本新治との交流がはじまる。

《宮本との交友は（きっかけは不明であるが）昭和二年の夏休み明け、聖護院に移って以後に始まった》（山本皓造）。

九月二日（大塚に）。

にはかなる夜冷えは樹々に
こたゆらむ柿の実かたく地に
おつる音。

九月十二日 朝、諫早町と北高来郡の全域を襲った暴風雨による本明川の氾濫で泥海となる。

十月十二日（安代に）

わが宿のかまつかいよいよ赤き時にま旅に堪えて友つきにけり
この友の愁いを分つすべ知らずあはれをしらな土産なりとも

十月十五日土曜日 百合子から姫路への招きを一旦断わるが、十七日迄滞在。

十月十七日（宮本新治に）。

穩つづく山脈彼方の空あかり
やがてひそかにきゆるなりけり

赤はだの小山の上の人二人
手に取るごとく？（話し声きこゆ）

十月十九日（宮本新治に）。

おちやま くるる
はりまぬ かげる
いのる子は たれの子

十一月（安代に）。

うつそみの蜂はたまたますがりつつ つひにわぶしき枇杷の花な
り

十一月十一日 盲腸炎で京都帝国大学付属病院第六病舎に入院。
（*大塚宛昭和三年十一月二十七日付封書）。

十二月十日 安代より誕生祝の菓子。

十二月十七日 午後退院

十二月十八日（大塚に）

垂乳根の母手作りの
真綿着てやうやく
我はさかだたむとす

十二月二十一日 五十日ぶりに大学へ行く。

日付不詳（百合子に）。

汝が歌によく出る真木の枇杷の木はこれのことかと友ほゝえむも
さなり、友 この幼な実をみてくれよと
老木のしたにわれほゝえむも
枇杷の木の話をやめて楽々と障子のうちにわれ等ひざくむ

そば六銭 天井六十銭 牛肉百グラム四十銭 カレーライス十二銭

コーヒー十銭 ビール四十二銭 市電六銭 入浴料七銭 理髪五十銭

昭和三(一九二八)年

三月十一日 午後四時四十分京都発下関行普通列車で京都を立ち、三月二十二日 佐賀から諫早に帰省、四月十七日まで滞在。

武者小路実篤と芥川龍之介を全集で読み、武者小路の粗雑さに同感できず、芥川には感心したり窮屈を感じる(宮本)。

三月二十七日 寿恵男とゴルフ場の方を散歩して、菜種の花の畠の間を通りながら、田園極楽と賛美(宮本)。

三月二十九日 寿恵男、佐賀高等学校文科乙類合格発表。桜の盛りになりいい時候(宮本)。

四月八日 親類の子供たちと御館山に登る(宮本)。

四月十七日 写真屋を呼び、二階の坐敷で、兄英一も床をあげて、静雄が彼のヒゲを剃つてやつて、皆で写真を撮る。諫早をたち、佐賀、姫路に寄り道、二十二日頃京都へ。

四月二十八日 大津市役所水道課長と就職の件で面談。

五月五日 大隈言道歌集『草徑集』を毛筆で書写。

五月十九日 《明日、酒井先生一家が京都ニヒキコス様ニナルノデ、ソーナツタラ私モスツカリ元気ニナルト予期シテル、一人キルノハムズカシイモノダ》(大塚)。

酒井小太郎夫人娘二人と京都市東山区今熊野南日吉町二〇〇に姫路から転居。

五月三十日 (安代に)。

家の外とに柿の花咲き

その柿とに雀とゐる故

そのことを心にもちて
寂びしけど寂しきままに
うらやすう夕ゆづの座ざにゐる。

五月三十日 (蒲池歎一に)

家の外とは柿の花咲き

その柿とに雀居る故え

そのことを心にもちて

さびしけど さびしきまゝに

うら安う 夕ゆづの座ざにゐる

六月四日 関東軍張作霖を爆死。

六月十四日 《私ハモウ休暇ニナツタ、今マデヒドクアセツテヤツト今頃オチツクトモウ休暇デ、大変物足ラヌ、論文モ大抵見当ガツイテ来タ、着実ニ研究ノ歩ヲス、メテキルノ子規ニツイテヤルツモリダ》、《酒井サンガ山科ノ山地ニ家ヲモタレテカラハ私ハ三日一晩位ナ割デ泊リニユク》(大塚)。夕景の鴨川や、京都の梅雨が気持を落着かせる(同)。

七月十日 《昨今ハ童話ノ習作ニ没頭シテキル》(大塚)。

七月十一日 童話に心を染め、今熊野の座敷で朗読会をやる(宮本)。

七月十五日 岡崎公園を横切つて、動物園下の疏水にこどもの泳ぎを見にでかける(宮本)。

童話「お坊さんひきと蟾ひき」を得る。

七月二十八日 (宮本に)。

ブリッジ下の泳ぎ場

みてをれば子等の泳ぎのうつつなき
電車も人も用なし子等には

八月初旬 諫早帰省。酒井安代来諫、江口某をさそい、十二日頃雲仙に行く。

八月十一日 大阪毎日新聞「御大礼記念児童映画脚本募集」を広告。

八月十三日 午後酒井安代 京都へ。その後宮本新治来諫。

九月八日 大阪毎日新聞「締切近づく」と再広告。

《今秋の御大典に際し、当店に於いては奉祝記念として『こども博覧会』を開催する事といたしました。之に先だちその付帯事業の一つとして『児童映画脚本』の懸賞募集を計画いたしました。大阪毎日新聞社に於いては此挙に賛して多大の後援を与へられ、去月上旬発表以来、各地より夥しき照会を受け、又既に多数の応募作品にも接してをります。《我小国民にふさはしいすぐれた作品を隠れた作家から求め得て、一は教育映画界の刺戟となり、一は直接児童の幸福となりますれば当店の最も欣幸とする所で御座います》(『大阪の三越』九月一日発行)。(ルビ省略)

九月二十九日 長男英一死去、二十九歳(明治二十七年七月十四日生)。賢明院藤林良英居士。

《伊東静雄の精神の暗黒部は幼少期の体験にあるように思う。静雄は兄弟七人で、長兄英一はやや知恵おくれで、働くことも結婚もせず、三五歳で不しあわせに亡くなっている》(福地邦樹)。

* 福地邦樹のこの記述が何を典拠としているのか確認がとれていない。

伊東静雄 生誕から就職まで

十月十日 大阪毎日新聞見出し、《厳選を重ねて／選ばれた三大作／脚本応募の新記録を作った／本社後援 児童映画》。応募総数千四百十七篇、予選通過五百編、最終五編を選出。

一等(賞金一千元)「美しい朋輩達」京都市上京区聖護院西町一元岡方 伊東静雄

二等(賞金三百円)「お月様とシロ」大阪市東淀川区本庄東通三ノ三九 石崎 豊

三等(賞金二百円)「前途洋々」東京府下滝野川町中里四一二 阪井方 竹腰芳樹

《美しい滑稽を／眼目にした／一等当選者／伊東君の話》、《京都帝大文学部国文科三年生で、本年廿三歳、その報をもたらずと／当選しましたか。初めての作であり、自分の力が判らないため不安でした。夏休みに郷里(長崎県諫早町這松下)で書いたものですが、母が大変心配して励ましたりお祈りしたりしてくれました。「美しい朋輩達」は美しいほゝゑましい滑稽を織込み、善と悪とを対立させながら強ひて善を主張せず、美を眼目としたつもりです、きれいなことを主張した映画をつくりたいと思ひましたと語った》。(ルビ省略)

上記の三篇に「まことの箱」、「祖国の歌」をくわえた五篇から、大阪毎日新聞社の伊東恭雄、井上吉次郎、和氣律次郎、稲田達雄によって選出された。

作者より

わたしの故郷は、長崎に七里の田舎、雲仙岳のふもとです。この作を私は其処で書きました。昼は城址の森を窓から見ると二階に坐つて書きつゞけ、夕の食卓において行つてはそれを皆に読み上げてきかせました。若い弟妹達や、老いた母の、それに対する無邪気な助言は私をほゝゑますことが度々でありました。この仕事は何と楽しいものでありましたらう。その上に、この作の主人

公煙突屋の三吉君は、私自身でさへありました。構想し、書きつけた四十日間のこの三吉君との微妙な共同生活は、私を純情にし、大人と子供に通じてゐる一つの真を教へてくれました。

『さようなら、三吉君とその朋輩達！』私はそう云ひながらこの作をポストに投げ込んだのであります。

皆さん少年の心は、それはきれいなきれいなものなのです。けれど只時々悲しい過を犯しやすいのです。その過を過と知り悔と涙で決心をしてお祈りしたならば皆さんは神様の様に美しく、世界は天国になるであります。

わたくしはこの作の発端に、これだけの文句を書きつけました。けれど、子供の心を高めるのは決して言葉ではありません。いつもほんとうに心の糧になるものは形を持つてはいません。漂ふてゐるもの——それだけが、心の扉のすき間からは入るのです。其処では美が同時に善であり真であることがはつきり感ぜられるのであります。

私の母と同じ様に慈愛と力に満ちたおかあ様方、そして私の大好きな子供達！

わたくしはこの私のつまらぬ作が、あなた方の目の前にあらはれて来るのを、待ちわびてゐるのでございます。(ルビ省略)

《審査所感》大阪毎日新聞社 伊東恭雄／五百篇を得るためひとつ／読んで行くうち感じたことは、余りにも現在興行されてゐる新派悲劇に近いものゝ多いといふことでした。／その点当選した三篇は誠になごやかで、詩味もあり、明るく健全な——といふ募集条件にびつたり当てはまつたものでした。／童心に触れてゐるとでも申しませうか——如何にも子供の夢の世界、詩の世界が美しく描かれてゐました。《『大阪の三越』十一月一日発行)。

《懸賞募集『児童映画脚本』当選発表／一千七百十四篇の応募作品

より選ばれた三大作——一等作品は直ちに映画化》(同)。

伊東静雄は次のように紹介されている。

《長崎県諫早町這松下、惣吉氏五男にて明治三十九年十二月生れの本年廿三歳、大正十二年四月同県大村中学校四年を終了して佐賀高等学校文科乙類に入学、同十五年四月京都帝国大学文学部国文科に入り、目下三年在学中、明年三月卒業の筈》(同)。

《当選しました童話が映画となつて諫早にもまいりました。母は入場券を沢山買つて親類や近所に配りました。父と母とは諫早で上映されている間、毎晩毎晩見に行きました。父母生涯の喜びの中の、ほこらしい喜びの一つであつたらうと私は思います》(江川ミキ)。

十月十三日 《例のわしの脚本、まんまと一等に当せんし、急に大金持にはなる、文士扱ひにされる、あちこちで招待宴にひき出される、全く茫然としてゐる、まず喜んでくれ給へ(十日の大毎参照)》(大塚)。

十一月二十日前後 大塚格 盲腸炎で長崎医科大学付属病院十室入院。二度の手術を経験。年末まで病臥。

十一月二十二日 大阪松竹座で『美しい朋輩達』封切、観客のこともに挨拶(大塚)。

十二月二十日 全国の映画館で一斉上映。

十二月三十一日発行 同志社専門学校高等商業部の学友会文芸部『学友会誌』第六号には宮本新治と署名された「我が校を讃へる」と「水雨降る日」が掲載されている。また、風郎の「いい男」は小高根二郎によれば、これも宮本の作品で、静雄をうたったものだといふ。さらに、宮本の厚情によつて、一九二八・一一と脱稿日付の付された可憐草(いとうしそ)、「(童話)山科の馬場」(一〇〇〜二頁)が投

稿された。

いい男 風郎

一

彼は

地味な男でござる

頭の大きい男でござる

柄がらは小さいがひげ男でござる

二

それで 静かな男でござる

人の心を

よく判つて

黙つて微笑む男でござる

三

何にも

出来ない男でござる

冷く 澄んだ男でござる

小さい庵の男でござる

四

彼は

まだまだ若いのでござる

立派な知恵はその頭でござる

眼玉のするどい男でござる

我が校を讃へる

宮本新治

一

光ひかり 鮮あざに

黒土こくどを射れば

生命いのちも 若く

萌えたり 草は

光 光 我らは光

二

力 強く

磐根いはねをおろす

大和真洞まほらに

比叡ひゑに対へ

力 力 我らは力

三

命 遠く

豊旗雲とよはたぐもの

涯かきりを知らず

流ると 見えて

命 命 我らは命

四

光と力

光と命

世界は 此処こゝ従ゆ

御国みくには 此処こゝ従ゆ

あゝ我ら あゝ同志社

《昭和三年といえは、伊東静雄の生家がある這松下かいわいに変化が生じ始めた頃である。料亭、酒場、旅館などが軒並みにならび、しだいに一帯は遊郭めいてくる》(野呂邦暢)。

島原鉄道、諫早、島原、加津佐間全線(七八・五キロ)開通。

桐箆筒 五十〜六十円

昭和四(一九二九)年

一月三日 京都、《正月の朝からひどい雪》、《行くところもない私は、年もとらず、どうにも食はずで、かなり寂しい元日だった。／もうすぐ論文の清書をすまして、京をひきあげて、諫早に行きたいと思つてゐる。たぶん十日頃》(大塚)。

*静雄が今熊野か姫路での酒井家正月に遠慮したのか、訪問できない雰囲気だったのか、確証できるデータはなし。

一月十五日 卒業論文提出日 四百字五十枚(石井庄司)

三月初旬 卒業論文口頭試問(同)。

《只今「去来抄」の解説を拝見し終つたところです。それにつけて思ひ出しました。わたくしが大学卒業の作文の中に、「去来抄」の中の二、三句を、しかも夜店で十五銭かいくらかで求めた活版本の中から大へん重大な引用をして口頭試験の時先生から、「去来抄」はそんなに平気には信用ばかりしてはいけないのではないかと意味の御注意をいただいたことがあります。そのみをつらなわけではないわたくしは、「去来抄」そのものについての御注意はそんなものかなあ位ののんきな度胸でゐましたが、引用に用ひたあのひどい本を先生から見破られたのぢやないかと冷汗を流したことであります》(昭和十四年二月二十八日付頼原退蔵宛封書)。

三月二十三日 夕景に諫早に帰省。

《大学卒業の頃、父がある知人に無尽の保証をしていたらしゅうございませうが、その人の失敗により、その無尽の掛金のかかりの金額を父が月々払つていたらしく、父の死後それがあの人の負担となり、すまなく思います》(江川ミキ)。

*身内の証言は注意があるが、多大な負債ということに言及した他の年譜は何を根拠としているのだろうか。

四月 宮本新治 同志社専門学校高等商業部卒業。

昭和六三年版校友会名簿によれば、六甲出版勤務、神戸市灘区宮山町三一―一十四(西田逸郎氏のご教示による)。

大阪市住吉区北田辺町五二二 宮地清太郎方。

下宿の前は広い沼、その畔には夕方になると子供達が集まってきて、いろいろな方法で遊ぶ(四月二十三日頼原退蔵宛封書)。

沼に近い原中の文化住宅風の小さい家(大塚)。

四月五日 大阪府立住吉中学校に国語教師として赴任、月給百十円。

《当時の同窓会誌(昭和4年10月発行)によれば二代校長になった高橋研助氏が「今年京都大学を出られた、元気のある愉快な方」と紹介したという》(中西靖忠)。

教師など

やめてしまひたい。

いやいやいや。(大塚はがき)

大学卒業者の就職難深刻化、東京帝国大学卒業生就職率三十パーセント、小津安三郎監督映画「大学は出たけれど」が共感を呼ぶ。

大卒サラリーマン平均初任給七十円から八十円（大我勝躬）。
赴任当日の朝礼で校長の紹介後、壇上の伊東は空を見上ながら、か
んだかい声を叫んだ。その日のうちに「こじき」というアダ名が行き
わたった（池沢茂）。

四月二十七日土曜日 一年生をつれて嵐山に遠足（大塚）。

五月 住吉区天王寺町一七五一 中西正次（中西昭和堂）方。

七月 「子規の俳論」『国語国文の研究』第三十四号 七月一日発行、
第三十五号 八月一日発行。

七月二十一日～八月二十五日 諫早帰省。

十月 住吉区阪南町中四丁目二 門柱、二畳位の前庭、タタキ、台
所、三、三、六畳、縁側、便所、二畳半位の裏庭。家賃八円五〇銭、
敷金四〇円。

芥川の傾向を克服するために全集をもとめて研究している（頼原退
蔵）。

十月十三日（百合子に）

目に見えて 糸瓜 揺れるる 夕かな

十二月 大塚格、静雄に縁談をすすめる。

十二月十一日 《チエーホフの全集など独逸からとりよせて、しば
らくは、この偉大な観察人の理解に没頭しやよと思つてゐる。芥川研
究も半ば完成しやよとしてゐる》（大塚）。

十二月二十六日 《私も今日から休みになつた。気分が幸福になつ

伊東静雄 生誕から就職まで

てゐる。近頃は独逸語によるロシア文学の研究に、一日五六時間以上
を費してゐる》（大塚）。

十二月 姫路高等学校同盟休校。

京都帝国大学新聞が左傾化、指導教官佐々木惣一博士が辞任、学生
部員全員解雇、週刊体制が月二回となる。《大学の新聞干渉反対の運
動がおこり、学内に抗議デモが渦巻いた。およそ数百名に近い学生は、
守衛や右翼学生の猶興学会と乱闘し、多くの学生が検挙された》（中
西武夫）。

板橋区仲宿一戸建て、または長屋形式（六、四半、三、台所、洗面
所）十一円五十銭

* * * * *
昭和六（一九三二）年

三月 酒井百合子 同志社女子専門学校英文科卒業。

昭和五年十二月発兌『同窓会学友会期報』（同志社女子専門学校
同志社高等女学部）第五十五号「昭和六年三月卒業見込」データの百
合子については出身学校（兵庫県立姫路高等学校）、生年月日（明
治四十三年六月二十日）、住所（京都市東山区今熊野南日吉町二〇〇）、
就職希望の有無（教員を希望、官署、会社その他は希望せず）となつ
ている。

昭和七年二月十一日発兌同誌第五十六号では住所は姫路市五軒邸六
七。

平成二（一九九〇）年

一月二十六日 長女（江川）ミキ死去、九十三歳（明治三十年九月
二十六日生）。諫早市名誉市民、元連合婦人会長、二月二十日市民葬。
www.isahayacci.com/s_history6.php?selectmonth=1 (2008. 11. 28)

《長女ミキ（江川ミキ）は戦後、諫早市の婦人会を結成したほどの

女丈夫である》(福地邦樹)。

引用・参考文献

- 青木敬磨「哀歌に」富士正晴編『伊東静雄研究』思潮社 昭和四六
青山霞村『同志社五十年裏面史』京都からすき社 昭和六
諫早近代史編修委員会編『諫早近代史』諫早市 平成二
諫早市立諫早小学校編『創立一〇〇周年記念誌』創立百周年記念事業協賛会
昭和四八
池沢茂「詩人とサラリーマン」富士正晴編『伊東静雄研究』思潮社 昭和四
六
石井庄司「伊東静雄と卒業論文 その構成と評価」『現代詩読本10 伊東静
雄』思潮社 昭和五四
伊東静雄研究会『伊東静雄 酒井家への書簡に見る文学熟成の息吹』平成十
九
岩波書店編集部編『近代日本総合年表』昭和四三
碓井雄一「初期詩篇から『わがひとに与ふる哀歌』へ——抒情の当為性に
ついて——」『日本文学研究』第三十五号 平成八
江川ミキ「伊東静雄の思い出」長崎造船大学人文科学研究室『人文研究』第
一号 昭和四七
大岡昇平『中原中也』講談社文芸文庫 平成元
大我勝躬「学生の頃の伊東静雄」『諫早文化』
大阪市役所編『昭和大阪市史 経済編』昭和二八
『大阪の三越』昭和三年九月一日、同年十一月一日発行
大塚梓・田中俊廣編『伊東静雄青春書簡 詩人への序奏』本多企画 平成九
小高根二郎『詩人伊東静雄』新潮選書 昭和四六
小高根二郎『詩人、その生涯と運命 書簡と作品からみた伊東静雄』国文社
昭和五一
『角川日本地名大辞典 四二 長崎県』角川書店 昭和六一
蒲池敏一「中学時代の思ひ出」『果樹園』第三十九号 昭和三四
川副国基「伊東静雄の故郷」富士正晴編『伊東静雄研究』思潮社 昭和四六
川副国基「詩人伊東静雄の報われぬ愛」『現代詩読本10 伊東静雄』思潮社
昭和五四
『京都帝国大学一覽 自大正十五年至昭和二年』
桑原武夫編『定本伊東静雄全集』人文書院 昭和四六
近藤富枝『本郷菊富士ホテル』中公文庫 昭和五八
『佐賀高等学校一覽 大正十二年』
週刊朝日編『値段の明治大正昭和風俗史』朝日新聞社 昭和五六
杉本秀太郎『伊東静雄』筑摩書房 昭和六〇
杉本秀太郎編『伊東静雄詩集』岩波文庫 平成元
杉本秀太郎編「詳細伊東静雄年譜」『ユリイカ』昭和四六年一〇月
チエーホフ、神西清訳『かもめ・ワーニャ伯父さん』新潮文庫 昭和四二
同志社高商学友会文芸部『学友会誌』第六号 昭和三
『長崎県大百科事典』長崎新聞社 昭和五九
中島健蔵『昭和時代』岩波新書二七五 昭和三一
中西靖忠「同僚としての伊東静雄」富士正晴編『伊東静雄研究』思潮社 昭
和四六
中西武夫「昭和の青春」『証言の昭和史Ⅰ』学習研究社 昭和五八
野呂邦暢『小さな町にて』文芸春秋社 昭和五七
福地邦樹『伊東静雄論 肯定的生活者』大阪商業大学論集 通号七九 昭和
六二
堀内薫「学生時代の伊東」富士正晴編『伊東静雄研究』思潮社 昭和四六
山本皓造『伊東静雄と大阪／京都』竹林館 平成十四
『あゝ、白陵の春の宵』財界評論新社 昭和四四